

あいち国際女性映画祭2009

デイリー
ニュース

本日午後5時からトークサロン「女性ドキュメンタリー監督と語る」を開催!!



鯨エマ監督



宮崎信恵監督



三浦淳子監督

女性ドキュメンタリー監督と語るをテーマに、5名のドキュメンタリー監督を迎えて、製作の視点や作品づくりについて、監督が語り、参加者が語れるトークサロンを開きます。

今回映画祭では、60歳以上の

アマチュア劇団かんじゅく座の旗揚げを撮った「つぶより花舞台」(鯨監督)、発達障がいのある人たちの生活と寄り添う職員の姿を記録した「あした天気になる? ~発達障がいのある人たちの生活記録~」(宮崎監督)、タイ最北端

メーサイにある「コンティップ村」の7年間を追い続けた「空とコムローイ〜タイ、コンティップ村の子どもたち〜」(三浦監督)、ロンドンの国会議事堂前の広場で8年以上も続けられる反戦活動に焦点を当てた「プライアンと仲間たち パーラメント・スクエア SW1」(早川監督)、日本の台湾統治51年を5人のインタビューで振り返る「台湾人生」(酒井監督)と、たいへん多彩なドキュメンタリー作品がそろいました。

コーディネーターは、当映画祭加古プロデューサーを務めます。

入場無料

日時 9月5日(土)17:00~18:00
場所 ウィルあいち 3F 会議室 5
定員 40名
※定員になり次第締め切り



早川由美子監督



酒井充子監督

映画祭3日目 ドキュメンタリー監督の熱い想いに共感!!

昨日、映画祭3日目は、ドキュメンタリー3作品を大会議室で連続上映。ゲストトークで披露されたドキュメンタリー監督の熱い想いに、どの会場も大きく沸きました。

▼あした天気になる? ~発達障がいのある人たちの生活記録~

宮崎信恵監督は、「3年前に『無名の人〜石井筆子の生涯〜』で観客賞をいただいてから、“歴史もいけれど、今の発達障害のことを”と多くの声が寄せられました。発達障害のある人たちは特別ではない、我々と同じ水平線上にいる人だということを知ってもらいたかったから。」と作品制作のきっかけを説明。



「この映画を撮り終えて一番最初に見てほしかったのが彼らでした。感想を聞くと、“僕が出てるのが少ない!”、“もっと映してほしかった!”という声ばかりで、心配も吹き飛ばされてしま

ました。」と会場の笑いを誘いました。

今後は、「このような映画をどのように伝えていくかは、大きなテーマであり悩みの部分でもあります。地域の中に自主運営の実行委員会を立ち上げ、小さいところから広がっていけばいいと思います。」と語りました。

上映中に作品に共感し、何度も涙を流している人たちの姿が見られ、最後に、監督は「これからも頑張っていきたいと思えます!」と力強く語りました。

▼空とコムローイ〜タイ、コンティップ村の子どもたち〜

ゲストトークでは、まず、最初に映画に出てきたアカ族の民族衣装を着たボランティアがステージに上がり、三浦淳子監督が衣装を説明。

続いて映画制作のきっかけについて、「最初は旅行で現地を訪れました。言葉も通じないので浮いてしまうのではないかと懸念しましたが、子どもたちをはじめ村の人たちは話しかけたりして、私の存在を気にかけてくれました。自分のことしか考えていない人が多くいる日本の皆さんに、この村の雰囲気を感じてもらいたいと思いました。村の神父さんに

は言葉も通じないのに映画が撮れるのかと驚かれました。」と笑顔で答えました。

この後、監督は、「私は映画を見ることも大好きなので、映画館で映像を見る楽しみもまた伝えていきたいです。一人から多くの人へと伝わっていくような映像を撮っていきたいです。」と今後の抱負を語りました。



観客からもタイに関する事、映画に関する事などの質問が寄せられるなど、和やかな雰囲気の中、ゲストトークは終わりました。

▼プライアンと仲間たち パーラメント・スクエア SW1

上映後のゲストトークで早川由美子監督は、作品制作のきっかけについて、「もともとジャーナリズムの勉強をしにイギリスへ留学したのですが、プライアンに出会って1年半のドキュメンタリー制作にはまりました。」と説明。イギリス滞在中は、「ネイティ

ブ並みに英語はできず、背が小さいため、日常的に差別を受け、例えば、銀行口座の開設に3ヶ月待たされたこともあった。一方、有利だった点は、持っているのが家庭用ビデオカメラで、プロでもないことが、かえって相手を構えさせず、自然体で撮ることができたことです。」とエピソードも紹介。

また、「デモを撮っている時に、出動した機動隊や警察に2mを飛ばされたことも。でも翌日の新聞には、デモが暴動化して、何名かが逮捕されたという記事しかでない。事実が全く変えられていると思い、マスコミの情報操作にびっくりしました。」との報告も。

最後に、「今後、もっともっとレベルアップして、皆さんが一步を踏み出すための勇気につながるドキュメンタリーを撮りたい。」と抱負を語りました。



明日午後1時半からワークショップ「世界の“フィルム・アーカイブ”を展望する」を開催



今年、今年、70以上の国・地域から148団体が加盟する国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)のアジア初の会長として選出された岡島尚志氏を迎え、「世界の“フィルム・アーカイブ”を展望する」をテーマにワークショップを明

日、午後1時30分から開催します。

岡島さんは、東京国立近代美術館フィルムセンターで、これまで映像文化を次世代へ継承するために、重要な役割を担ってこられました。

たっぷり2時間、映画専門家ならではの充実した論議をお楽しみください。

入場無料

日時 9月6日(日)13:30~15:30
場所 ウィルあいち 3F 会議室 5
定員 40名 ※定員になり次第締め切り

本日の上映作品&来場ゲスト

※詳しくは映画祭オフィシャルカタログ(1部¥500)をご覧ください。

▼赤い点



この作品は、ミュンヘンテレビ映画大学での私の卒業制作です。本作の題材は、ある通訳の依頼を引き受けた際、偶然私の元に舞い込んできました。依頼主の女性は、南ドイツを貫くロマンチック街道上に赤い点が記された地図を持参し、そこへ行きたいとのこと。のどかな田園地帯の道端にタクシーが止まると、そこには石碑が建っていました。かつてこの地である日本人家族が自動車事故に巻き込まれ死亡したのです。彼女の話によると、事故で亡くなったのは彼女の親戚で、6才の子供たった1人が生き残りました。一方で、その事故を引き起こした車はそのまま逃走し、現在に至るまで見つかっていないそうです。

この実話が私にインスピレーションを与えました。一瞬の事故により運命が交差した2人の人物。1人は家族を失い、もう1人は他者の命を奪ったという秘密を抱え、その後どのような人生を歩んで行くのでしょうか。2人の運命が再び交差したとしたら…。(宮山麻里枝 監督)

俳優 猪俣ユキさん



福岡県出身 1982年生まれ。99年塚本晋也監督『双生児』で映画デビュー。その後、ドラマ『カバチタレ!』、『お台場湾岸テレビ』、石井聰互監督『鏡心』など多数出演。また女優業と並行し、自ら映画脚本・監督を手掛けるなどマルチな才能を発揮。2003年に主演した映画『17才』では脚本を担当。その後、初監督した『ナオと僕』

は第6回水戸短編映画祭にノミネートされ、以降、PVやショートムービーを多数制作。2006年に公開された長編映画『ユモレスク〜逆さまの蝶〜』では、美波、太田莉菜を起用しガールズムービーとして注目を集めるなど監督としても注目されている。

▼ぐるりのこと。



時代が激変した90年代初頭。しっかり者の妻・翔子と、ひょうひょう者の夫カノオ。初めての子どもをなくした悲しみから、翔子は少しずつ心を病んでいく。困難に直面しても離れずに生きていく夫婦の10年間の軌跡と希望を、社会の変遷を背景に描いたラブストーリー。

橋口亮輔監督

1962年生まれ。長崎県出身。初の劇場公開映画『二十才の微熱』は、劇場記録を塗り替える大ヒットを記録。第2作『渚のシンパッド』(95)はロッテルダム国際映画祭グランプリほか数々の栄誉に輝く。第3作『ハッシュュ!』(02)は、第54回カンヌ国際映画祭監督週間部門に正式招待されたほか国内外で大絶賛され、世界52カ国以上で上映。『ぐるりのこと。』は『ハッシュュ!』以来6年ぶりの最新作。



▼子供の情景



原題『ブダは恥辱のあまり崩れ落ちた』は、ハナの父であるイランの巨匠モフセン・マフマルバフ監督の著書の題名から取った象徴的なもの。歴史的遺産パーミアンの石仏が、2001年3月、時の支配者タリバンによって破壊されたことが、この映画製作の動機になっています。脚本は母マルスイエ・メシュキニ。

母とパーミアンを訪れたハナが目撃したのは、子供たちの過激な戦争ごっこでした。銃を向ける男の子達から逃げようとするバクタイに「死ぬば自由になれる!」とアッバスが叫びますが、刃向かわなければ無事に過ごせることも生活の中で大人から学んでいることとハナはいいます。ロシア、タリバン、アメリカと、支配者が変わる度に、人々は生きるために頭の中で自分を殺して違う人物を作らざるを得なかったのです。

(景山咲子 日本イラン文化交流協会事務局長)

▼台湾人生

台湾との出会いは1998年、「愛情

萬歳」(蔡明亮監督)という映画を見て、舞台となっていた台北という街を歩いてみたいと思い、フラリと旅したのが最初でした。このとき、流暢な日本語で話しかけてくれたおじいちゃんがいました。バス停での立ち話でしたが、子供のころにかわいがってくれた日本人教師を今も慕い続けているということを一気に

語ってくれました。いま思えば、そのおじいちゃんとの出会いが「台湾人生」の出発点でした。



台湾の日本語世代の方たちへの取材は、日本人である自分や日本という国に向き合う作業でもありました。かつて日本が台湾でしたこと、戦後日本がしてこなかったこと、それを知らなかった自分。取材を受けてくださった方たちが、みんな教えてくださいました。みなさんの話を聞き、驚いたこと、おもしろかったこと、悲しかったこと、怒りを覚えたこと、情けなかったことなどを、そのまま伝えたいと思いました。

(酒井充子 監督)

酒井充子監督

1969年、山口県生まれ。産應義塾大学法学部卒。エンジニアリング会社営業マン、北海道新聞記者を経て2000年からドキュメンタリー、劇映画の宣伝・制作に携わる。5年の歳月をかけて制作したドキュメンタリー映画『わたしの季節』(04)に取材スタッフとして参加し、このときのスタッフが再結集して初監督作『台湾人生』を完成させる。



▼エスケープ



7月になって、アフガニスタン反政府武装勢力タリバンが、同国で6月末から行方不明になっている23歳の兵士を拘束していることをネット上で公開した。これ以前にも兵士や記者の拉致誘拐があったが、インターネットに流

れるこういった映像が、映画化のきっかけになったという。本作が実話を映画化したかのように、緊迫感にあふれた衝撃的作品であるのはそのせいだろう。

カトリーネ・ヴィンフェルド監督の、見事な長編デビュー作だ。デンマークは01年よりアメリカに同調し、アフガンとイラクに派兵をしている。自国のジャーナリストが戦地で拉致される、という設定こそ特異で政治的ではあるが、監督が描きたかったのは、<人間としてどこまで自分を犠牲にして人助けができるか>ということ。私たちが誰の身にも起こりうる

ことだ。

(渡辺芳子 ジャーナリスト)

カトリーネ・ヴィンフェルド監督

1966年生まれ。95年に国立ポーランド映画学校の監督コースを卒業。短編やドキュメントを手がけ、02年『Little Man』でシカゴ子供映画祭で入賞。DR(デンマーク国営テレビ)でエミー賞に輝いたドラマシリーズ『Unit 1』(03)のADを経て、スウェーデンのテレビシリーズ『The Crown Princess』(05)で注目される。本作が長編監督デビューとなる。



▼『つみきのいえ』～【アニメーションスタジオCAGE】特集上映～



第81回アカデミー賞短編アニメーション賞に輝いた『つみきのいえ』。その『つみきのいえ』を生み出したのは、『ALWAYS 三丁目の夕日』シリーズの企画制作で知られる映像制作会社ROBOTの社内ユニット【アニメーションスタジオCAGE(ケージ)】です。【アニメーションスタジオCAGE】に所属するのは『つみきのいえ』の加藤久仁生をはじめ、TV番組、CM、有名アーティストの 프로모ーション映像等で様々な手法のアニメーションを手がけている野村辰寿、稲葉卓也、坂井治の計4名。

今回はこれまでに彼らが制作した代表的な作品20本(56分)を特別編集でお届けします。

◆今日・明日のチケット情報/日にち、会場、売行き状況(○余裕有、△残少、×完売)、作品名(上映時間)

◎9月5日(土)

⇒ウィルホール

○「赤い点」(10:00)

○「ぐるりのこと。」(14:00)

○「子供の情景」(18:30)

⇒大会議室

○「台湾人生」(10:00)

○「エスケープ」(14:00)

△「つみきのいえ」(18:30)

⇒レストラン Will

×交流パーティー(18:30)

◎9月6日(日)

⇒ウィルホール

○「劔岳 点の記」(10:00)

○「飛べ、ペンギン」(14:00)

⇒大会議室

○「チベットの音調」(10:00)

○「シネマ・ピクニック」(14:00)